

## 紹介

### ●眞盛上人御傳記集 牧野信之助編著

本書の編纂由來は後記に據れば、編者が滋賀縣滯在中に亡はれた御長男の追善の爲め、同地滯在中最も深い感化を受けた眞盛上人御傳記集を版行して少しでも多く上人の遺徳を世間に弘めたいとの願を以て編まれたとの事である。當時編者は滋賀縣史編纂の餘暇を以て坂本西教寺を訪ひ上人の行蹟を心ゆくまで體得し、この靈僧を通じて限りなき法悦に浸る事の出來たのを第一の幸としたと語られる。この敬虔の情が亡はれし愛子を慕ふ心によつて深められたものが本書を貫ぬく一精神である。卷頭に澤庵の西教寺を詣でた折の一絶「西方行者ト斯山、不斷稱名日夜閑、水鳥樹林皆念佛、見來安養在人間」が掲げられるが、この水鳥樹林皆念佛の語こそ本書編纂の各方面に於て抱かれた情であらう。各頁に見らるゝ周到の用意に斯る内容をもるに適はしい敬虔の情が感ぜられる。

内容は前後二編に分たれ、前編は上人と法語、史料及び年表とし、最初に人としての眞盛上人の一編を以て上人の面目を傳へ、次で法語、史料(御消息讚語等)年表(略年表及參考年表)を收める。後編は御傳記集として(一)眞盛上人往生傳記、(二)圓戒國師繪詞傳、(三)眞盛上人別傳、(四)西教寺中興眞盛上人傳、(五)西教寺中興圓戒國師和解傳を編纂する外に挿入寫眞廿一葉を載せる。美濃版鳥の子(?)の情趣豊かな傳記集(全集と云つてもよい)である。史料、傳記に就ては詳述の餘裕を有たない。たゞ上人の面目を傳ふる最初の一論文を紹介して全體に代へたい。

此論文に於ける編者の態度は先づ上人を教化者として見る事、即ち混亂の時代に於ける上人の遊化救濟の事蹟を見るのである。人としての上人が此様の方面より見てより善く顯揚さるゝは申すまでもない。又歴史家として正しき態度である。(勿論斯く云ふは教義を顧みぬと云ふのでない。それを基礎として、その社會に於ける發現の方面を見ようとするのである。)従つて時代を考察して心

敬僧都のひとりごとにより長明の方丈記と對比し、上人の出現を要求した時代の姿を見てゐる。此處で方丈記とひとりごとの時代を機械的に對比する事は避けねばならぬし、又鎌倉初期の宗教改革が此時に第二の改革を必要とした事情に就いて興味ある問題が含まれてゐるが然しそれは此論文の當面する問題ではない。次に上人の各方面に於ける教化の事蹟を特に公卿日記により皇室との問題を顯揚された事を多とする。尚上人の戒律觀、從つて其

無欲に就いて注意すべき記事があり其點明惠上人（上人も亦編者の崇敬措かざる方である）とのつながりを見てゐる。が、最後に蓮如との比較は感慨深きものがある。

山科に本願寺王國を建設し其追從者の門に一向一揆を景發するに至つた蓮如と、一油煙の寄進をすら佛の意志により受くる事を頼み又其聽法者の間に自殺者の輩出した眞盛と、兩者の對比は宗教の社會性を考ふる上に根本問題を含む。宗教的世界の實現意念は何等かの形で現世界の秩序との摩擦を伴はずにはゐられない。それが武器を執つて克服する態度に出るか或は自殺の如きの形で自ら

現世的秩序より退くか各人の氣稟にもよるであらうが、尙戒律を守り行ひ澄ます人に聖なるものを感じる事を云ひ度いのである。（此事は榮西と道元とに就ても考へられうるであらう。）

尙本書編纂中編者は御次男と令弟を一月の中に亡はれ、本書が兩人の供養ともなる事を追記される。私は當時種々お話を承つた。今感慨を新にして此一書を人々に奨める。上人の遺風のより多く顯揚さるゝ事は即ち國民の精神的生活を豊にする事であり、同時に編者の所願であるからである。（定價三、五〇、三秀舎發賣）〔藤〕

### ●手島堵庵全集

手島堵庵の著書はその生前より歿後に及んで博く世に流布し且つそのことが比較的新しい時代のことに屬するので今日之を坊間に求めること必ずしもさまで困難ではなく、またその主要なるものは明治以後幾度も活字に翻刻されて何處に於いても容易に見ることが出来るが、中に當時多く施本として彼が道話の聽衆に頒たれた一枚刷や小冊子様のものは、それが當時心學に於いて多く用ひ